

第4章

第2部 第1次アンケート（試行版）調査 東大阪市・入間市・高知市等中学校教員

長沼 君主・小泉 仁

1. はじめに

本章は「小学校英語活動と中学校英語の連携についての総合的研究－研修の実態と教員の意識調査－」（平成19年度～平成21年度科学研究助成）研究プロジェクトの一環として実施した第1次アンケート（試行版）調査の報告である。2007年7月末から8月末にかけて、大阪府東大阪市、埼玉県入間市の協力を得て、また、高知県高知市とその近郊の教員若干名の協力を得て実施した、中学校教員に向けた意識調査の結果と内容の分析、そして2008年度に実施を予定する本調査に向け、考察を行った過程を記述する。

2. 研究の目的と背景

本章で紹介するのは、全国的調査の準備段階における、試行版としての第1次アンケート調査である。小学校での英語活動・外国語活動を経験した中学生を受け止める立場にある中学校教員の、小学校での英語指導に対する意識調査が目的である。

現在、全国の小学校において「総合的な学習の時間」における英語活動として実践されているものは多種多様である。これまで中学校教員は、生徒にとって初めての英語教育を担当する立場にあったのだが、英語経験のまちまちな新入生に接し、これまでに経験したことのない難しさを抱えることになった。彼らこそ、英語教育における小・中連携を最も強く意識せざるを得なくなっているはずである。「外国語活動」の、領域としての必修化を間近に控え、小学校外国語活動をコミュニケーション能力の「素地」として中学校英語教育へ連携していくさまざまな方法を模索しつつ、一つの方向性を明確にすることが可能だろうか。ここに、本プロジェクト・チームは、小学校教員への調査と平行して、中学校教員の小学校英語活動に対する意識を明らかにするための調査を計画した。

当初、この調査は2007年度末までに実施する予定だったが、質問項目の準備にあたり、まず、具体的な現状を十分に把握することが必要であると判断し、次年度に予定していた懇談会形式の現場教員の意見の聞き取り調査を前倒しで実施することにして、この調査は2008年の夏に回したが、それは、2008年3月に中学校学習指導要領が告示され、中学校教員にとっては小学校での外国語活動との連携を否応なく意識しはじめた時期であった。

3. 調査内容

3.1 調査の概要

東大阪市と入間市からは市の教育委員会を通じ、また、高知市では地域の英語教育研究会の協力を得て協力者を募った。調査は2008年7月上旬から8月下旬に実施し、97人の回答を得た。

質問項目の設定にあたっては、小学校教員向け調査に対応するものとなるよう、第4章第1部に報告した小学校教員向け第一次調査の質問項目をベースに、本研究プロジェクトのメンバーが討議して決定した。項目は大きく分け次の4つの観点から設定した。（＜資料編＞参照のこと）

- (1) 小学校での英語指導経験の有無
- (2) 中学校教員から見た小学校英語活動の成果
- (3) 中学校教員として小学校英語活動に期待することがら
- (4) 小・中学校英語の接続についての意識

問1から問3までは選択肢を複数設定した中から1つを回答させた。問4から問7までは、複数選択肢の中から重要度を判断し上位3つを選択する形式とした。問8から問16については、設問に対する賛否についてリッカート法により、「そう思う ...4」「どちらかというと思う ...3」「どちらかというと思わない ...2」「そう思わない ...1」の4段階から選択して回答する形式とした。

他に、自由記述欄を設け、小学校英語必修化への不安やその他の意見を求めた。中学校教員からは、小学校英語活動を肯定する意見も見られたが、かなり多くの教員が不安要因について書き込んだ。書き込まれたコメントや意見については、機会を改めて論考する。

3.2 調査結果

次に調査結果を示す。

【回答者プロフィール】

性別：男性 41人(42.3%)、女性 55人(56.7%)

教員歴：平均 15.1年

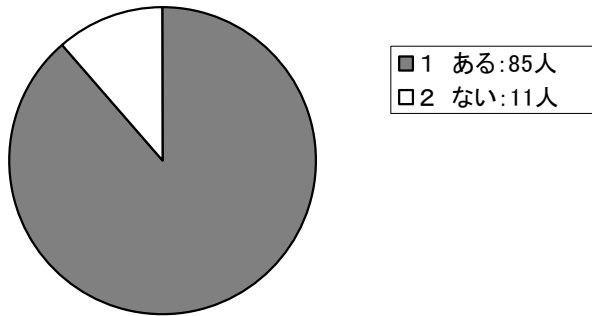
勤務校所在地：東大阪市・入間市・高知市など

小学校英語にかかわった（ている）：

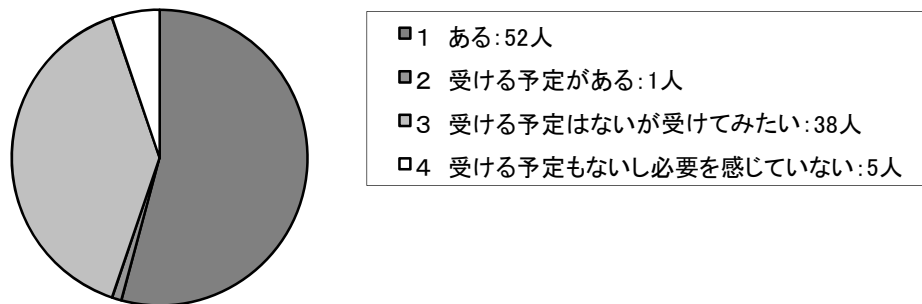
学級担任として：4人、担任以外で：7人 *人数寡少のため経験平均年数未算出

小学校教員免許を：持っている 37人(38.1%)、持っていない 43人(44.3%)

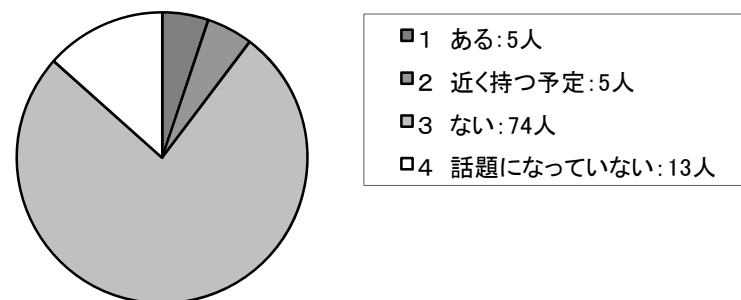
- 1 あなたは、中学1年生をこの3年間（平成17～19年度）で担当したことがありますか。または、現在（平成20年度）していますか。



- 2 小学校英語活動や児童英語についての研修や研究会に出たことがありますか。



- 3 小学校英語の必修化に向けて、対策のための会合などを科内で持つことがありますか。



第1次アンケート（試行版）調査の結果、中学校教員の回答者97人のうち、男性は41人、女性は55人とほぼ半数同士であり、平均教員歴は15.1年であった。小学校英語に過去に関わっていた、または現在関わっている人数は、学級担任としての関わりのある（あった）者が4人、担任以外での関わりのある（あった）者が7人と、合計しても11人と

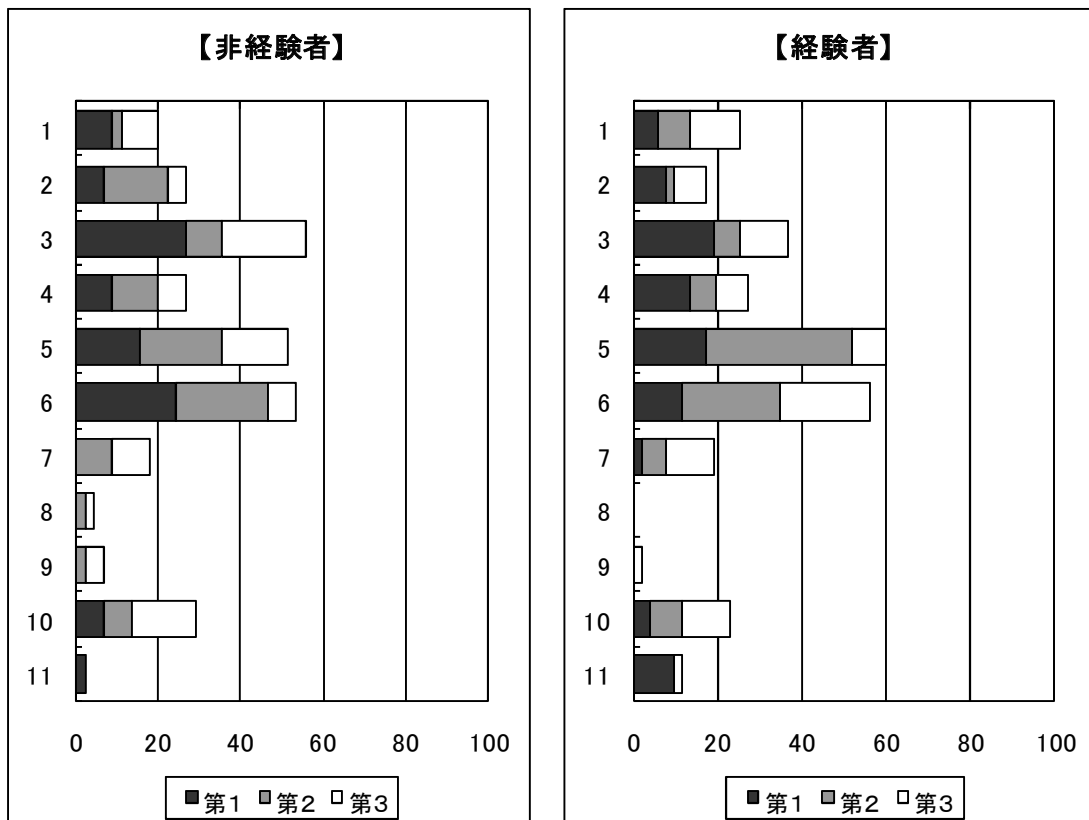
1割を少し超える程度であったため、今回の分析では小学校英語経験の有無による比較分析は行わなかった。小学校教員免許を持っている者は37人、持っていない者は43人であったが、小学校英語教育経験を持つ者は多くなかった。

小学校との接続において重要となる中学1年生の担当に関しては（問1）、85人が過去3年間受け持ったことがある、または現在受け持っていると回答しており、大多数の教員が小学校英語を意識せざるを得ない環境にいたることが分かった。小学校英語などについての研修等への参加の有無に関しては（問2）、ほぼ半数の52人があると回答したほか、受ける予定があると受けてみたいと回答した者が39人と合わせて91人であり、ほとんどの教員が小学校英語について考える機会があったことがわかった。しかしながら、実際の接続に関しての校内での会合に関しては（問3）、持ったことがあるまたは予定があると回答した者が合わせて10人と非常に少なく、現実の対応について検討しているかと言えば、そうではない様子が伺えた。

そこで以下の分析にあたっては、小学校英語の必修化に対する校内での対策の有無ではなく、研修会への参加の有無に着目し、参加したことがある52人（以下、「経験者」）とその他の45人（以下、「非経験者」）に群を分け、経験の有無による意識差を分析した。なお、問4～問7に関しては、順位の高い順に回答を選択する形式であったことから、1番目の回答における頻度差をクロス集計による残差分析で検定を行った。その結果、5%で有意差のあった項目に関しては、選択肢の横にアスタリスク（*）をつけた。問8から問16に関しては、分散分析により平均の差の検定を行い、下位のいずれの質問項目において差が見られたかを単純主効果の検定により行った。結果、5%で有意差のあった項目については同様にアスタリスクをつけた。

4 小学校段階で児童に経験しておいてほしいと思われるものは何だと思えますか。必要度が高いと思う順に3つ答えてください。（単位：パーセント）

	【非経験者】				【経験者】			
	第1	第2	第3	計	第1	第2	第3	計
1	8.9	2.2	8.9	20.0	5.8	7.7	11.5	25.0
2	6.7	15.6	4.4	26.7	7.7	1.9	7.7	17.3
3	26.7	8.9	20.0	55.6	19.2	5.8	11.5	36.5
4	8.9	11.1	6.7	26.7	13.5	5.8	7.7	27.0
5	15.6	20.0	15.6	51.2	17.3	34.6	7.7	59.6
6	24.4	22.2	6.7	53.3	11.5	23.1	21.2	55.8
7	0.0	8.9	8.9	17.8	1.9	5.8	11.5	19.2
8	0.0	2.2	2.2	4.4	0.0	0.0	0.0	0.0
9	0.0	2.2	4.4	6.6	0.0	0.0	1.9	1.9
10	6.7	6.7	15.6	29.0	3.8	7.7	11.5	23.0
11*	2.2	0.0	0.0	2.2	9.6	0.0	1.9	11.5



- | | | | |
|--------------|--------------|------------|---------|
| 1 英語の歌 | 2 ゲーム活動 | 3 簡単な会話 | 4 単語の発音 |
| 5 アルファベットの発音 | 6 アルファベットの識別 | 7 基礎的な語彙 | |
| 8 基礎的な文法 | 9 絵本の読み聞かせ | 10 簡単な教室英語 | |
| 11 特になし | | | |

問4の小学校段階で児童に経験しておいてほしいと思われる活動に関して、研修経験者と非経験者とで有意差のあった項目はほとんど観察されなかったものの、第3希望までをあわせた回答において、3の「簡単な会話」で非経験者は半数の55.6%が重視していた一方で、経験者では36.5%に留まり、小学校英語に期待する内容が異なる傾向があることが読み取れる結果となった。また、2の「ゲーム活動」への回答に関しても同様の傾向差が見られた。

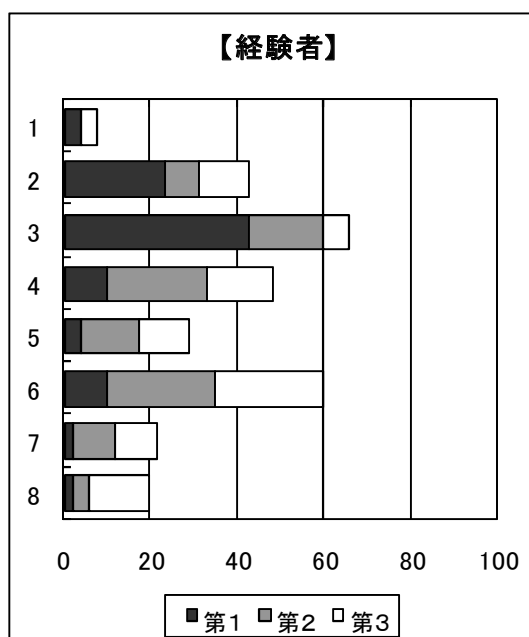
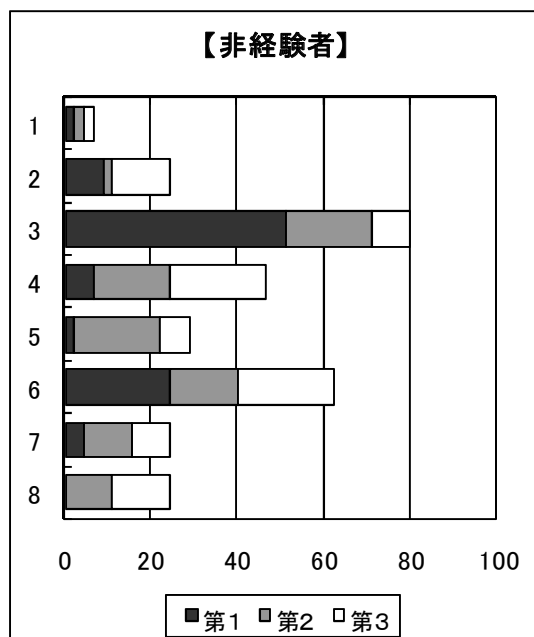
このことは、小学校英語のイメージとして、よくあげられる簡単な会話やゲームが非経験者における回答に影響しているためと思われるが、経験者では5の「アルファベットの発音」や6の「アルファベットの識別」への回答が、59.6%と55.8%とやや多い結果となっており、会話への期待はそれほど高くなく、その前段階としてのアルファベットの習得をきてきて欲しいという期待が高いことが分かった。

アルファベットの習得に関しては、非経験者でも「簡単な会話」に続いて、高い回答と

なっており、小学校英語の必修化において音声指導が優先され、読み書きが必ずしも奨励されてはいない現実とは相反する結果が見られた。

5 中学校英語との連携を考えて、小学校側の体制づくりのために必要なものは何だと考えますか。必要度が高いと思う順に3つ答えてください。（単位：パーセント）

	【非経験者】				【経験者】			
	第1	第2	第3	計	第1	第2	第3	計
1	2.2	2.2	2.2	6.6	3.8	0	3.8	7.6
2	8.9	2.2	13.3	24.4	23.1	7.7	11.5	42.3
3	51.1	20	8.9	80.0	42.3	17.3	5.8	65.4
4	6.7	17.8	22.2	46.7	9.6	23.1	15.4	48.1
5	2.2	20	6.7	28.9	3.8	13.5	11.5	28.8
6*	24.4	15.6	22.2	62.2	9.6	25	25	59.6
7	4.4	11.1	8.9	24.4	1.9	9.6	9.6	21.1
8	0	11.1	13.3	24.4	1.9	3.8	13.5	19.2



- | | | |
|-------------|-----------|--------------|
| 1 週2時間以上の授業 | 2 公的な教員研修 | 3 専科教員の配置 |
| 4 A L Tの配置 | 5 統一教科書教材 | 6 小学校と中学校の連絡 |
| 7 校内推進体制の整備 | 8 相互の授業参観 | |

問5の小学校側の体制づくりのために必要なものを問う質問に関しては、6の「小学校と中学校の連絡」において、第1番目にあげた者が研修非経験者で24.4%であったのに対して、経験者では9.6%であり、非経験者の方が学校間での連絡を重視する結果となった。それに対して経験者では、有意な差ではなかったものの、2の「公的な教員研修」を1番目にあげたものが23.1%と非経験者の8.9%と比べて差があり、経験者では公的な教員研修の充実を望む声が高いことがわかった。研修を経験することにより、より接続への意識がより明確化し、体制作りよりもまず先に、体制を作るためのより多くの具体的な情報が必要とされている現実が見て取れる。

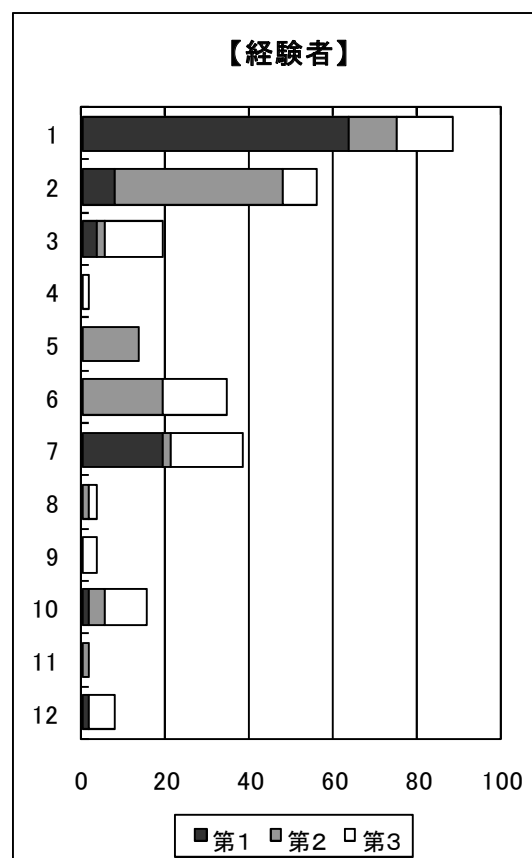
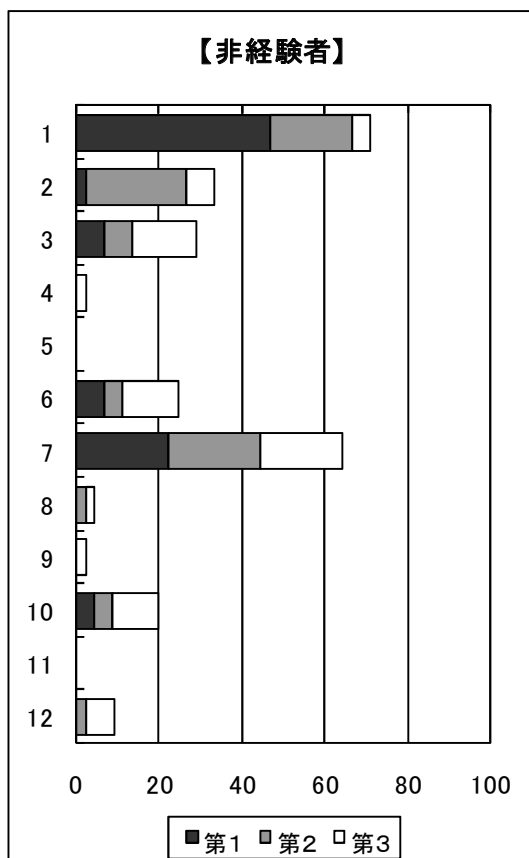
経験者、非経験者ともに、これらの「公的な教員研修」や「小学校と中学校の連絡」よりもさらに要望の高かったものは「専科教員の配置」であり、それぞれ42.3%と51.1%と半数近くの教員が1番目にあげていた。第3番目まで含めると経験者では65.4%、非経験者では80.0%に登り、非経験者でより切実に求められていると考えられていることがわかった。一方で、経験者では第3番目まで含めた順位では、「公的な教員研修」の重要度も42.3%と高く、非経験者では24.4%に留まった。これらを考えあわせると、研修経験者の中学校教員は、小学校教員が専科教員に頼るだけでなく、さらなる研修の充実により自分たちで解決する、または共に解決していくための方策を考えることが必要だと認識していると言えるであろう。

「専科教員の配置」は経験者、非経験者のいずれにおいても「ALTの配置」よりも必要度が高く、ネイティブ・スピーカーの配置を必要と考える一方で、それを上回って専科教員が必要であろうと考えられているようであった。

6 いまの小学校英語活動で育ってきているのは、どのような力だと思えますか。強く思う順に3つ答えてください。(単位：パーセント)

	【非経験者】				【経験者】			
	第1	第2	第3	計	第1	第2	第3	計
1	46.7	20	4.4	71.1	63.5	11.5	13.5	88.5
2	2.2	24.4	6.7	33.3	7.7	40.4	7.7	55.8
3	6.7	6.7	15.6	29.0	3.8	1.9	13.5	19.2
4	0	0	2.2	2.2	0	0	1.9	1.9
5	0	0	0	0.0	0	13.5	0	13.5
6	6.7	4.4	13.3	24.4	0	19.2	15.4	34.6
7	22.2	22.2	20	64.4	19.2	1.9	17.3	38.4
8	0	2.2	2.2	4.4	0	1.9	1.9	3.8
9	0	0	2.2	2.2	0	0	3.8	3.8
10	4.4	4.4	11.1	19.9	1.9	3.8	9.6	15.3

11	0	0	0	0.0	0	1.9	0	1.9
12	0	2.2	6.7	8.9	1.9	0	5.8	7.7



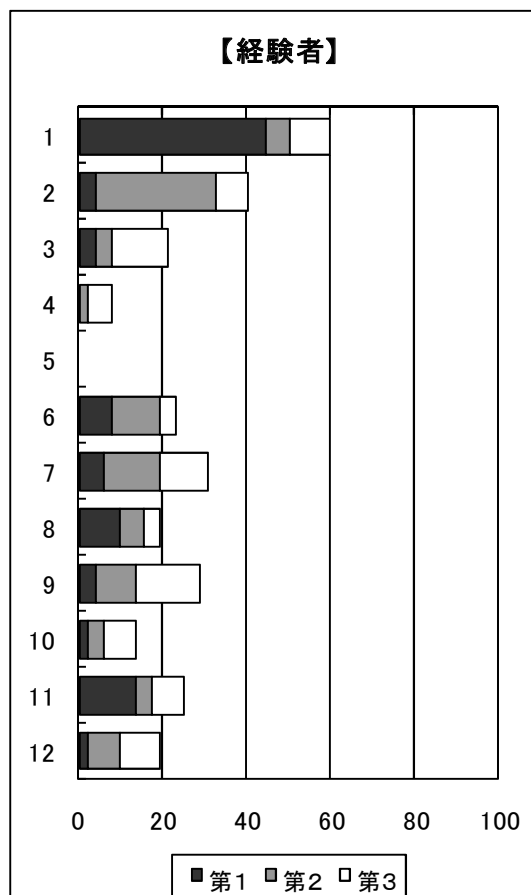
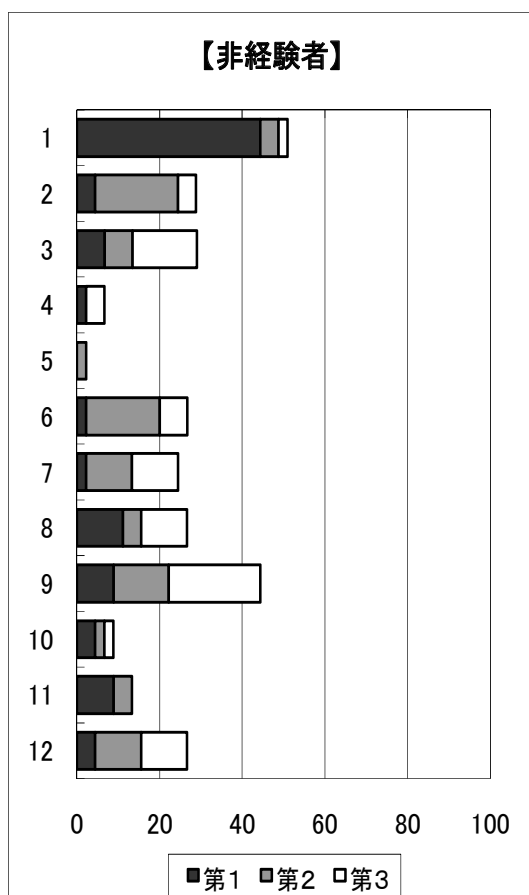
- | | | |
|----------------------|--------------------|---------|
| 1 英語の音やリズムに慣れ親しむ | 2 英語を聞く | 3 英語を話す |
| 4 英語の語句を読む | 5 英語の語句を書く | |
| 6 外国の文化や生活について知る | 7 外国の人と交流する | |
| 8 言葉によって円滑に人間関係を結ぶ姿勢 | | |
| 9 自己表現する意欲を養う | 10 母語話者と向き合おうとする姿勢 | |
| 11 先生の言うことを聞こうとする姿勢 | 12 進んで発表しようとする姿勢 | |

問6の小学校英語で育ってきていると考えられている力に関しては、第1番目に回答した選択肢において有意な結果は得られなかったものの、経験者、非経験者ともに1の「英語の音やリズムに慣れ親しむ」をあげており、63.5%と46.7%であった。また、第3番目の順位まであわせると、88.5%と71.1%であった。大多数の教員は、4技能等のスキルが習得されたり、情意や態度が育ってきているというよりは、音やリズムに親しんできていると考えているようである。

しかしながら、2番目に全体的な回答が多かった項目に関しては、経験者では2の「英語を聞く」が55.8%と高かったのに対して、非経験者では7の「外国の人と交流する」が64.4%と高く、研修を経験した教員においては、聞き取る力がついているとの認識が高いことがわかった。逆に非経験者では「外国の人と交流する」ことといった力がついてきていると考えられており、問4で「簡単な会話」活動が重視されていたことと同様に、小学校英語活動への一般的なイメージを反映した傾向を示した。

7 今後、小学校で育てるべき力は、何だと考えますか。設問6の選択肢1～12から最も大切だと思う順に3つ教えてください。（単位：パーセント）

	【非経験者】				【経験者】			
	第1	第2	第3	計	第1	第2	第3	計
1	44.4	4.4	2.2	51.0	44.2	5.8	9.6	59.6
2	4.4	20	4.4	28.8	3.8	28.8	7.7	40.3
3	6.7	6.7	15.6	29.0	3.8	3.8	13.5	21.1
4	2.2	0	4.4	6.6	0	1.9	5.8	7.7
5	0	2.2	0	2.2	0	0	0	0.0
6	2.2	17.8	6.7	26.7	7.7	11.5	3.8	23.0
7	2.2	11.1	11.1	24.4	5.8	13.5	11.5	30.8
8	11.1	4.4	11.1	26.6	9.6	5.8	3.8	19.2
9	8.9	13.3	22.2	44.4	3.8	9.6	15.4	28.8
10	4.4	2.2	2.2	8.8	1.9	3.8	7.7	13.4
11	8.9	4.4	0	13.3	13.5	3.8	7.7	25.0
12	4.4	11.1	11.1	26.6	1.9	7.7	9.6	19.2



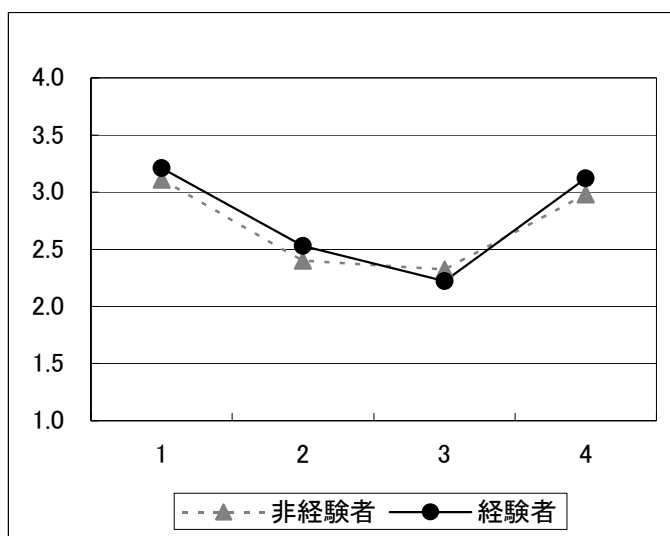
- | | | |
|----------------------|--------------------|---------|
| 1 英語の音やリズムに慣れ親しむ | 2 英語を聞く | 3 英語を話す |
| 4 英語の語句を読む | 5 英語の語句を書く | |
| 6 外国の文化や生活について知る | 7 外国の人と交流する | |
| 8 言葉によって円滑に人間関係を結ぶ姿勢 | | |
| 9 自己表現する意欲を養う | 10 母語話者と向き合おうとする姿勢 | |
| 11 先生の言うことを聞こうとする姿勢 | 12 進んで発表しようとする姿勢 | |

問7の小学校英語で育てるべきと考えられる力に関しては、経験者、非経験者ともに1の「英語の音やリズムに慣れ親しむ」を、重要度1番として最も多くあげており44.2%と44.4%であった。問6で育てていると思われる力として回答を求めた場合には63.5%と46.7%であったことを考えると、とりわけ研修経験者においては現状が最善だと考えている訳ではなく、他の力を優先してつけるべきと考えていることがわかった。回答は6から12にかけて散らばったものの、情意や態度に関わるものを重視する傾向が見て取れた。

全体的な傾向としては、問6ほど明確な傾向はないものの、経験者では2「英語を聞く」力が40.3%と高かったのに対して非経験者では9「自己表現をする意欲を養う」ことが44.4%と重視されていることがわかった。

8 小学校の外国語活動中に使用する言語を、どのように考えますか。

	【非経験者】		【経験者】	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
1	3.11	0.98	3.21	0.87
2	2.40	0.89	2.53	0.86
3	2.32	0.74	2.22	0.88
4	2.98	0.89	3.12	0.76



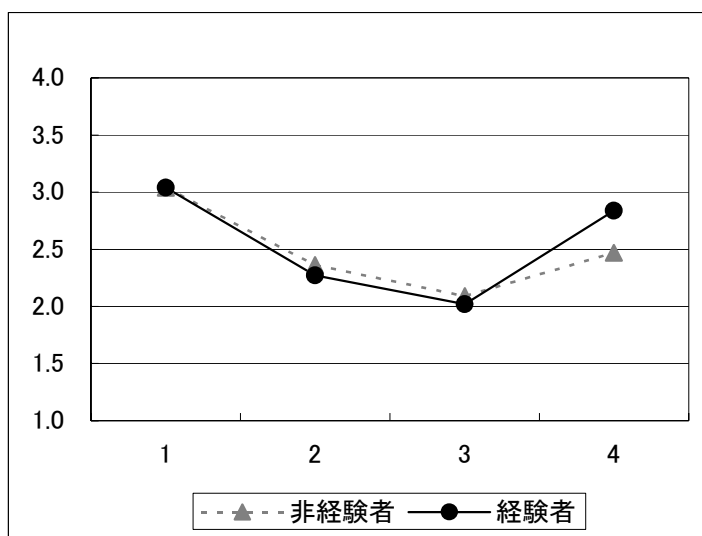
- 1 指導者も児童もできるかぎり英語を使う
- 2 指導者は英語を使うが、児童は日本語を使ってもよい
- 3 指導者は必要に応じて日本語も使うが、児童は英語を使う
- 4 指導者も児童も必要に応じて、日本語を使ってもよい

問8の小学校英語活動中に使用する言語に関しては、経験者と非経験者とで大きな意識差は見られなかった。回答としては、1の「指導者も児童もできるかぎり英語を使う」と4の「指導者も児童も必要に応じて、日本語を使ってもよい」の両極の回答が高かった。現実には、複雑な指示などで教師は日本語を用い、児童には英語のみを話させる場面があるように思われるが、そのような回答は多くは見られなかった。

高校の新指導要領の改訂に伴い、高校でも英語で授業を行うことが基本とされるようになった。小学校から中学校、高校へと英語で行う授業における日本語と英語の使用に関して、さらなる議論が必要となると想定されるが、今回の調査からもできる限り英語を使用すべきか、日本語を適宜用いてもよいかについては、意見が分かれる結果となった。

9 児童の卒業後に中学校に受け入れる立場にある者としては、児童の英語活動の成果をどのような手段で伝えてほしいですか。

	【非経験者】		【経験者】	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
1	3.04	0.90	3.04	1.00
2	2.36	0.91	2.27	0.96
3	2.09	0.93	2.02	0.88
4	2.47	1.10	2.84	0.99



1 児童の学習状況や成果の通知

2 段階別評価

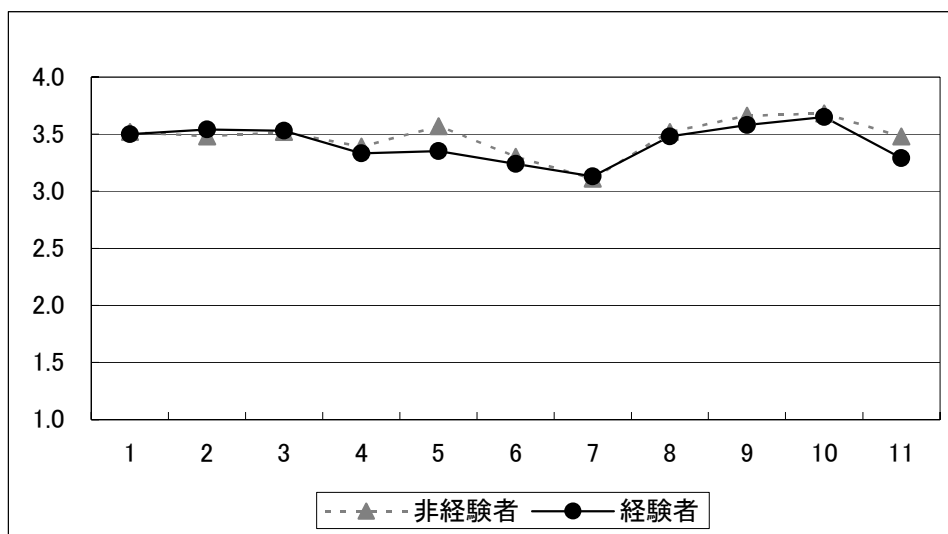
3 テストの結果

4 英語活動の様子を撮影したもの

問9の児童の英語活動の成果の伝達に関しては、経験者、非経験者ともに1の「児童の学習状況や成果の通知」を望んでいることが分かった。2や3のようなテストなどによる数値的な評価結果ではなく、通知表の記述のような報告書などによる質的なコメントを望んでいると言えよう。統計的な有意差はなかったものの、4の「英語活動の様子を撮影したもの」では研修経験者の方が高い意識であった。いわゆるポートフォリオ的な活動の記録であり、経験者においては、報告だけでなく、具体的な活動の様子を知りたいと思っれていることが見て取れる。小学校で行われている英語活動のより実際的な様子を見ることにより、中学での接続を考えて行きたいという意識の表れと見て取ることができる。

10 小学校の外国語活動を進めるにあたり、以下の項目はどの程度重要だと考えますか。

	【非経験者】		【経験者】	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
1	3.52	0.59	3.50	0.67
2	3.48	0.70	3.54	0.67
3	3.52	0.66	3.53	0.67
4	3.39	0.58	3.33	0.74
5	3.57	0.59	3.35	0.77
6	3.30	0.70	3.24	0.97
7	3.11	0.78	3.13	0.82
8	3.52	0.59	3.48	0.73
9	3.66	0.53	3.58	0.54
10	3.68	0.52	3.65	0.56
11	3.48	0.70	3.29	0.78



- | | |
|----------------------------|----------------|
| 1 教材の選定・入手 | 2 カリキュラムの作成 |
| 3 教育内容の明確化 | 4 指導者の英語運用力 |
| 5 指導者の指導技術 | 6 地域格差・学校格差の是正 |
| 7 授業時間数の確保 | 8 授業準備時間の確保 |
| 9 A L Tや英語指導員等との打ち合わせ時間の確保 | |
| 10 A L Tや英語指導員等の人材の確保 | |
| 11 小学校英語専科教員の制度化と養成 | |

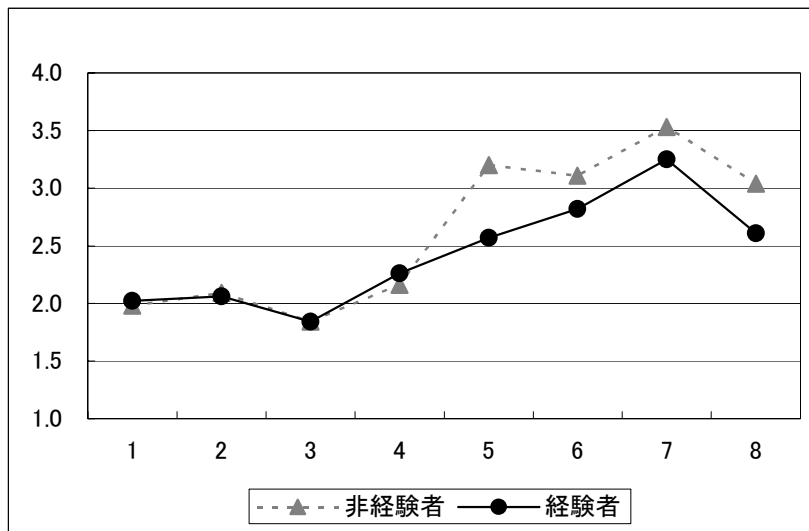
問 10 の小学校英語活動の促進において必要とされることへの意識については、全体的に高い結果であり、いずれの項目も重視されていることがわかった。中でも比較的意識が高かったのは、9の「ALT や英語指導員等との打ち合わせ時間の確保」や10の「ALT や英語指導員等の人材の確保」であり、ALT 主導の授業となりがちな中で、打ち合わせが十分にできていないことによる、場当たりの、付け焼刃的な授業となってしまうことへの懸念が見て取れた。

実際の教室でも、派遣会社によるネイティブ・スピーカーの派遣を受けている学校では毎回の授業の打ち合わせ時間が確保できず授業の進行に支障が出るケースが、ままある。また、打ち合わせにおいて保護者のボランティアの通訳に依存するケースなどもあり、ボランティアのいない時には打ち合わせができないといった現実もある。

今後の教員研修の充実により、ALT に頼り過ぎない授業が展開されるようになることが望ましいが、研修非経験者では5の「指導者の指導技術」への必要度を高く感じているのに対して、経験者では、有意差は見られなかったものの比較的低い意識に留まっている。研修経験者の中学校教員には、小学校英語の指導において、必ずしも高い英語指導技術が要求されるわけではないと認識されていることが示されていると伺える。

1 1 小学校英語における文字や単語の指導について、どのように考えますか。

	【非経験者】		【経験者】	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
1	1.98	0.89	2.02	0.88
2	2.09	0.95	2.06	0.84
3	1.84	0.82	1.84	0.87
4	2.16	0.98	2.26	1.07
5*	3.20	0.87	2.57	1.06
6	3.11	0.83	2.82	0.93
7	3.53	0.69	3.25	0.89
8*	3.04	0.85	2.61	0.96



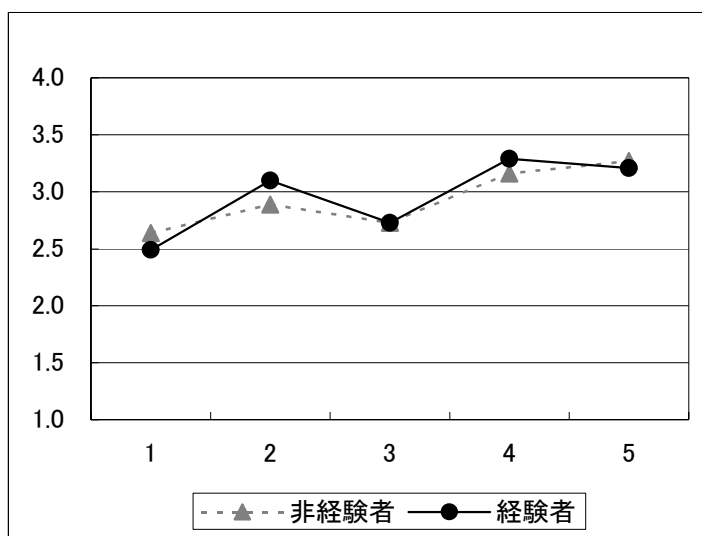
- 1 文字や単語のつづりは一切用いないでほしい
- 2 文字や単語を見せてもよいが、教えないでほしい
- 3 文字や単語を読ませないでほしい
- 4 文字や単語を書かせないでほしい
- 5 文字と音の関連について、ルールに気づかせてほしい
- 6 ローマ字との違いを教えてほしい
- 7 アルファベットは読めるようにしてほしい
- 8 簡単な単語は読めるようにしてほしい

問 11 の小学校英語における文字や単語指導のあり方については、5 の「文字と音の関連について、ルールに気づかせてほしい」と 8 の「簡単な単語は読めるようにしてほしい」とで統計的に有意な意識差があった。とりわけ、文字と音との関連といったいわゆるフォニックス的な指導については、非経験者で意識が高く、簡単な会話やゲームといった小学校英語のイメージとはまた別のイメージを形成していると言えよう。

全体的な傾向としては、音声のみに頼った指導ではなく、文字を活用した指導への希望が高く、非経験者においてその傾向が顕著であった。中でも最も高かったのは 7 の「アルファベットは読めるようにしてほしい」であり、問 4 でアルファベットの習得への期待が高かったのを反映した結果となった。

1 2 小中連携のための協力体制について、どのように考えますか。

	【非経験者】		【経験者】	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
1	2.64	0.83	2.49	0.81
2	2.89	0.75	3.10	0.86
3	2.73	0.84	2.73	0.75
4	3.16	0.80	3.29	0.70
5	3.27	0.79	3.21	0.78

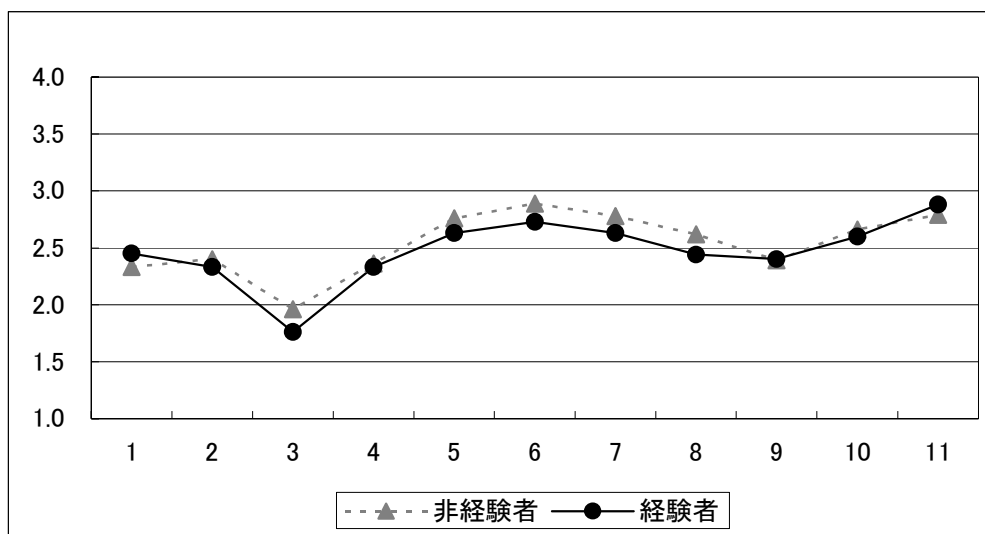


- | |
|--|
| <p>1 中学校教員が小学校教員に、アドバイスを行う</p> <p>2 中学校のALTが小学校を訪問しアドバイスを行う</p> <p>3 小学校から中学校にアドバイスを求めるシステムを作る</p> <p>4 小学校の英語学習状況を中学校に知らせる</p> <p>5 小学校と中学校との間で連絡会などを行う</p> |
|--|

問 12 の小中連携のための体制への問いに対しては、4 の「小学校の英語学習状況を中学校に知らせる」や 5 の「小学校と中学校との間で連絡会などを行う」への意識が全体的に高く、具体的なアドバイス等の交流はそれほど望まれていないことが分かった。具体的な交流の中で比較的支持を集めたのは、ALT による訪問指導であり、有意な結果ではないものの、研修非経験者においてより高い意識であった。このことは逆に中学校教員が英語の専門家ではあっても小学校教育の専門家ではなく、具体的なアドバイスを行うことに対してやや不安を感じ、消極的であることの表れであると思われる。

13 一般的に、中学校へ波及すると予想されることがらについて、どう考えますか。

	【非経験者】		【経験者】	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
1	2.33	0.91	2.45	0.91
2	2.40	0.86	2.33	0.85
3	1.96	0.56	1.76	0.68
4	2.36	0.80	2.33	0.83
5	2.76	0.77	2.63	0.77
6	2.89	0.68	2.73	0.82
7	2.78	0.80	2.63	0.74
8	2.62	0.81	2.44	0.67
9	2.39	0.81	2.40	0.66
10	2.66	0.89	2.60	0.82
11	2.79	0.83	2.88	0.88



- 1 英語を初歩から始める必要がなく、時間にゆとりが出る
- 2 ゆとりが出た分、これまでより深く教えることができるようになる
- 3 ゆとりが出た分、高校の学習内容にも触れることができるようになる
- 4 関心・意欲が高まり中学校での授業がしやすくなる
- 5 英語で授業が多くできるようになる
- 6 英語に慣れているので先生の英語への反応が速くなる
- 7 英語を聞く力がついて授業がしやすくなる

- 8 英語を話す力がついて授業がしやすくなる
- 9 語彙力がふえて読んだり書いたりする授業がしやすくなる
- 10 既に学んでいる分、新鮮味がなく、関心や意欲が低下する
- 11 既に学習差が生じ、授業がしにくくなる

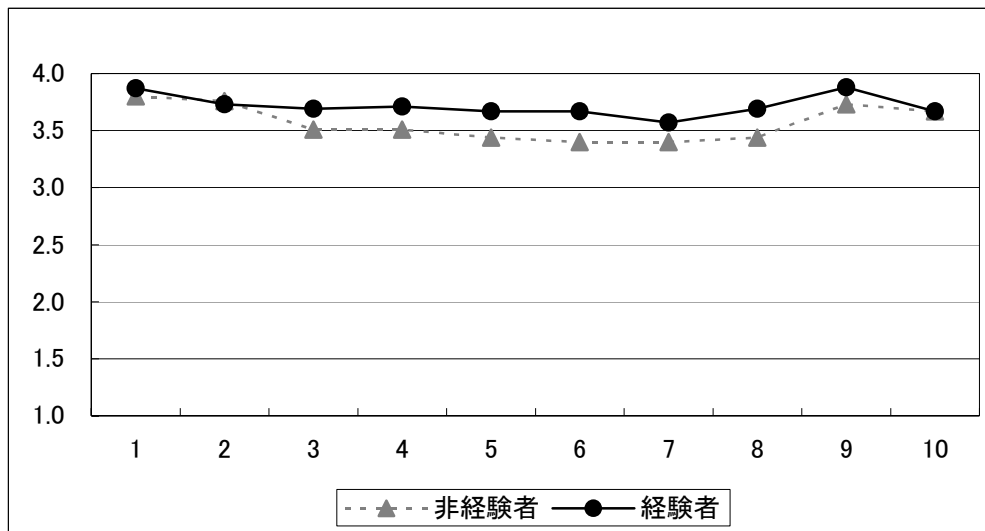
問 13 の中学校での英語教育への波及効果に関しては、3「ゆとりが出た分、高校の学習内容にも触れることができるようになる」がとりわけ低く、先取りのな効果が望まれているわけではないことが読み取れる。逆に最も高かったのは、11「既に学習差が生じ、授業がしにくくなる」であり、早期の英語学習による肯定的な側面への意識よりも、英語の学習経験がばらばらな学習者が入学してくることへの不安が反映された結果となった。

こういった不安を払拭するためにも、接続へのしっかりとした足固めをしていくと同時に、小学校教員のみならず、受け入れ側の教員の研修会も積み重ねて行き、これまでとは異なった、既に学習背景を持った生徒へ対応する具体的な方策を考えていく必要があるだろう。

一方で、6「英語に慣れているので先生の英語への反応が速くなる」といったような側面にも意識が高く、統計的な有意差は見られなかったものの、非経験者において、より高い結果であった。研修を受けて小学校英語活動の具体的な状況を知り、受け入れる際の不安が増していることが想定されるが、こうした不安を抱かせないためにも、双方の視点からの接続の研修が必要となるであろう。

14 中学校で育てるべき力について、以下の各項目はどの程度重要と考えますか。

	【非経験者】		【経験者】	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
1	3.80	0.41	3.87	0.35
2	3.76	0.44	3.73	0.45
3	3.51	0.55	3.69	0.47
4	3.51	0.55	3.71	0.50
5	3.44	0.62	3.67	0.52
6	3.40	0.62	3.67	0.55
7	3.40	0.62	3.57	0.58
8	3.44	0.66	3.69	0.51
9	3.73	0.45	3.88	0.32
10	3.67	0.48	3.67	0.51



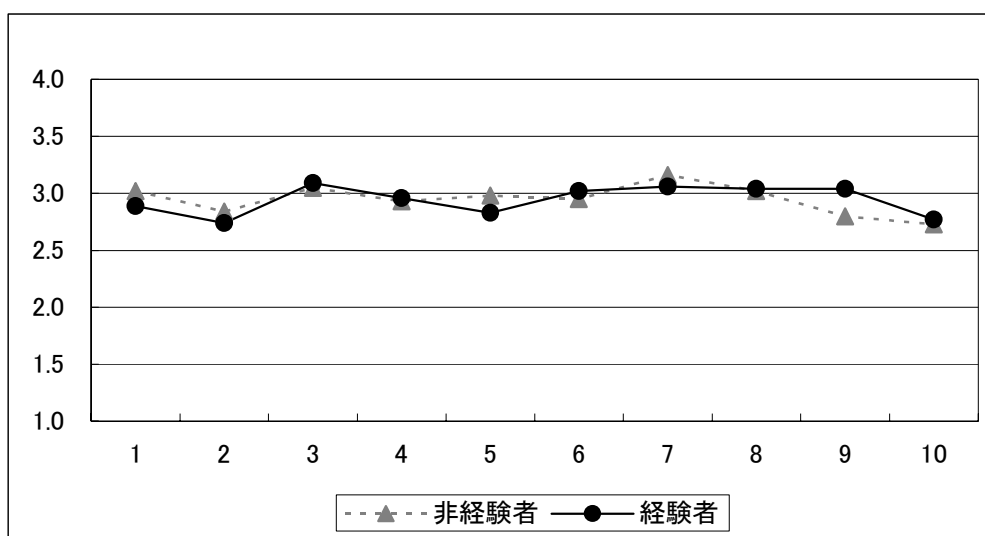
1 英語を聞くこと	2 英語を話すこと
3 英語の語句を読むこと	4 英語の語句を書くこと
5 英語の語彙をふやすこと	6 英語の発音
7 英語の文法	8 英語を正しく音読すること
9 自己表現する意欲を養うこと	10 異文化理解

問 14 の中学校で育てるべき力への意識に関しては、いずれの項目においても非常に高い結果であり、全般的な能力を伸ばすことが意識されていることが分かった。中でも比較的意識が高かったのは、経験者、非経験者ともに、1「英語を聞くこと」や2「英語を話すこと」、9「自己表現する意欲を養うこと」であり、音声的指導が中心とされていることの反映であろう。研修経験者では、有意な差ではないものの、文字や語彙、文法の指導への意識が高いことが伺え、小学校英語において音声主導の指導がなされる一方で、不足してくとと思われる文字を活用した指導も重視すべきといった意識が表れていると思われる。

15 以下の項目について、現在あなたはどの程度自信を持って指導に当たることができていますか。

	【非経験者】		【経験者】	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
1	3.02	0.59	2.89	0.73
2	2.84	0.65	2.74	0.77
3	3.05	0.48	3.09	0.72
4	2.93	0.59	2.96	0.81

5	2.98	0.64	2.83	0.73
6	2.95	0.69	3.02	0.77
7	3.16	0.61	3.06	0.76
8	3.02	0.59	3.04	0.72
9	2.80	0.63	3.04	0.75
10	2.73	0.69	2.77	0.79

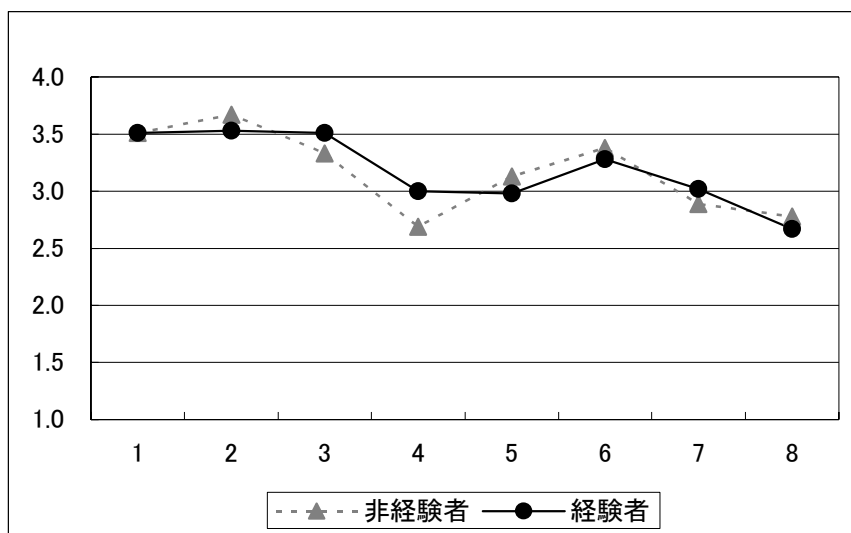


1 英語を聞くこと	2 英語を話すこと
3 英語の語句を読むこと	4 英語の語句を書くこと
5 英語の語彙をふやすこと	6 英語の発音
7 英語の文法	8 英語を正しく音読すること
9 自己表現する意欲を養うこと	10 異文化理解

問 15 の指導にあたっての自信に関しては、比較的高い値ではあるものの、問 14 の必要度への意識ほど高い結果ではなかった。中でも低い自信であったのは、2 の「英語を話すこと」と 10 の「異文化理解」であり、小学校英語からの引継ぎにあたり重要となるであろう項目で不安が見られることは、今後の研修のあり方を考える上での課題となるであろう。

16 小中連携を踏まえ、中学校英語教員として何に重点を置いた研修や研究会に出たいですか。

	【非経験者】		【経験者】	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
1	3.51	0.63	3.51	0.69
2	3.67	0.56	3.53	0.69
3	3.33	0.71	3.51	0.69
4*	2.69	0.79	3.00	0.86
5	3.13	0.79	2.98	0.85
6	3.38	0.75	3.28	0.68
7	2.89	0.71	3.02	0.79
8	2.78	0.80	2.67	0.85



- | | |
|-------------------------|----------------------|
| 1 英語力の向上 | 2 英語で授業を行うための指導技術・方法 |
| 3 教材の作成・選定 | 4 指導案・指導計画 |
| 5 A L Tなどとのコミュニケーションの仕方 | |
| 6 ティーム・ティーチングの方法 | |
| 7 評価の方法 | 8 小学生の発達や心理 |

問 16 の小中連携を踏まえた研修会への希望については、4 の「指導案・指導計画」において、研修経験者で有意に高い結果であった。研修を経験することにより、1 や 2 といった英語力や指導技術の向上だけでなく、より具体的なシラバスについての意識が高まっていることを反映してのものと思われる。一方で、8 の「小学生の発達や心理」への意識は低く、

あくまでも受け入れ側として、何が必要とされるのかに重点をおいた研修が望まれているのであろう。

4. まとめ

小学校教員向け第位置次1次調査の結果と、中学校教員向け第1次調査を比較して総合的に考察すると、いくつかのよく似たポイントと、相互の違いを表すポイントが浮かび上がってくる。

例としては、小学校英語活動で身につくと思われることがらについては、中学校教員で小学校英語に関わる研修を経験した者と、小学校教員との間に類似する意識を見ることができた。両者において英語の音やリズムに慣れ親しむことに次いで、英語を聞く力をあげており、異文化との交流よりも上回っていた。

また、連携に関する意識については、小学校教員では、とりわけ英語活動経験のある教員において、申し送りや連絡会よりも具体的なアドバイスを求める傾向が強かったのに対して、中学校教員では、具体的なアドバイス等の交流よりも小学校からの申し送りや連絡会への要望が高く、中学校よりも小学校サイドからの積極性が勝ることが確認できた。小学校英語活動を体験した児童を受け入れる側の中学校としては、小学生時代の英語活動の内容に関心が高いことは言うまでもないが、必ずしも、自分たちの指導する前の段階に多くを期待していないことも、調査の結果から明らかになった。

最後の自由記述については、書き込みは極めて多く、小学校英語活動への関心が高いことが理解できるものであったが、概して否定的なコメントが多くあった。自分たちがこれまで英語の初学習者を対象に行ってきた授業方法に、大きな改革を余儀なくされることへの不安がそこに表れている。書き込まれたコメントや意見については、機会を改めて論考する必要がある。

この中学校教員向けの質問項目は、小学校教員向けの第1次アンケート調査を実施した直後に、小学校版の第2次アンケート調査の質問項目の準備と平行して検討されたため、今後訂正する箇所は多くないと考える。

以上、小学校教員と中学校教員を対象にした第1次アンケート調査の双方について、第1部、第2部としてここに報告した。このデータについては、さらに、懇談会形式での聞き取り調査等の成果を合わせて、考察を深め、第2次アンケート調査の実施と結果分析に反映させなくてはならない。